

誠 実 と 変 身

——戯曲「エレクトラ」を中心にして——

佐 藤 方 代*

Das Treue und Die Verwandlung

——Über Hofmannsthals “Elektra”——

Michiyo SATO*

(Received March 31, 1983)

(1) 序

ホーフマンスタールがソポクレスの悲劇を翻案した戯曲『エレクトラ』は、年譜によると、『チャンドス卿の手紙』を発表する前年（1901年）に計画され、1903年、M・ラインハルトの演出によりベルリンで初演された。後に、リヒャルト・シュトラウスとの最初の共同作業としてオペラ化された作品である。

原典となったソポクレスの悲劇は、ミュケナイの王女エレクトラが、父王アガメムノンを殺害した母親への復讐を誓い、弟オレストを動かしてそれを成し遂げる復讐物語である¹⁾。

(2) ホーフマンスタールのエレクトラ像

ホーフマンスタールが作りあげた「エレクトラ」は、非業の最後を遂げた父王への思慕と母への怨みのために錯乱した姿で登場する。自らの心を怨念で塗りこめ、毎日同じ時刻に父を呼び、復讐の夢を語りかける。

.....

いまあの時刻です、私達のあの時刻です！

あのふたりのものが、あなたの妻と、あの男、

王者であるあなたの閨をあなたの妻とともにした

あの男とがふたりがかりで、あなたを打ち殺した時刻です。

.....

.....

お父さま！勝利の日はかならず来ます！星また星から時が降り

そそぐように、

百人もの悪者どもの咽喉からあなたのお墓の上に

血が降りそそぎましょう。

たおれた甕から水が流れだすように

ぐるになった殺人者どもから血が流れだし、血だまりのまわりには

そのふたりに手をかした者たちの素裸のむくろが男といわず女といわず、

大理石の壁さながらに横たわりましょう、そして潮となって、水嵩あふれる川となって、かれらの生命のなかの生命はかれらのからだからほとばしりましょう

.....

.....²⁾

このような夢に浸りきって、エレクトラは、もはや周囲の世界との交流を失っている。ただ、父を殺害されたという過去の出来事が、内面の夢想と外側の世界を結んでいるだけである。その過去の出来事にこだわり続けることによって、辛うじて自己の生を支えているのである。過去から離れることは、彼女にとって父への裏切り以外の何ものでもない。

わたしは獣ではない

わたしには忘れることなどできない！³⁾

「忘れないこと」は、人間としての誠実の証しなのである。

決定的なものは行為ではなく誠実にある。⁴⁾

という『Ad me ipsum』のメモは、エレクトラのこうしたありようを指したものである。

しかし、「忘れない」という過去への固執があまりにも強烈であるために、周囲の世界へ一歩も踏み出すことができず孤立した閉鎖的な生へ追いこまれ、その中でいっそう過去への執着を強めることによって、さらに閉鎖と孤立が深くなるという、限らない循環に陥ってゆく。その循環からぬけ出るための行為——エレクトラの場合は復讐——へ踏み出すことさえできぬまま、ただひたす

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences—Foreign Languages)

ら弟の手による事の成就を待つばかりである。こうしたあり方は「生へ結びつこうとしており、また結びつくべき詩劇の主人公達が⁵⁾、行為における孤立の中で硬化している⁶⁾」のと共通した様相を帯びている。自らは何も行わず閉鎖の中で夢の実現を待望するだけの現在は空虚なものとしてゆく。そうした孤立と空洞化がエレクトラの生を根底から突き崩すに至ったことは、精神の錯乱とともに、美しかった容姿が、弟の目を疑わせるほど、醜く変り果ててしまっていることにも象徴されている。

わたしは美しかったのだ
鏡の前でランプを吹き消すとき、わたしは
はじらいとともに感じたのだ、
裸になった身体が、蒸し暑い夜のうちに
触れられたことのない美しさで、神々しいほど輝くのを。
.....
わたしの髪は、男たちを震えさせた。
その髪が、もつれ、汚れ、卑しいものとなってしまった。⁷⁾

このエレクトラの述懐が、美しいだけに、ぼろをまとして家畜のように暮している姿の異様さを浮き彫りにする。

ようやくにして弟オレストが復讐を果すべく戻って来たとき、エレクトラはすでに、何ものでもありえず、何ごとも為しえぬ虚無に陥っている。すぐには姉と気づかぬオレストに向って、自分自身を次の様に紹介する。

わたしは母ではない。母もいない。
姉でも妹でもない、きょうだいはいない、
戸の前に居るが、番犬ではない、
口はきくが、話しはしない、生きていて
生きていない、長い髪をしているが、
女の感じるようなことは、何も感じない、
.....⁸⁾

こうしたエレクトラ像に対比する人物として、彼女の妹クリソテミスが重要な位置を占めている。

クリソテミスは、過去から解放され新しい人生へ踏み出すことを望んでいる。

.....わたしは出て行きたい！
わたしはみごもって、子供を生みたい、
このようなことは何も知らない子供を生みたい、
わたしはいつも水で身体を洗って、いつも深く
水に身体を沈めるのです、すべてを
洗い去って、両の眼のくぼみを、
清らかにしている——子供たちが、母の眼を見て
驚かないように！⁹⁾

ホーフマンスタール自身が作品について述べるとき、非常に重要なテーマとみなしている「生への道」(der Weg zum Leben)のモチーフがここに表われている。

業績、そして子供による生への(そして社会的なるものへの)道。¹⁰⁾

『Ad me ipsum』¹¹⁾には上のような覚え書きがくり返し記されているが、ホーフマンスタールのいう「生への道」とは、社会的な存在としてのより高い自己へ達する生成発展を指しており、その経緯として a)行為 Tat を経るもの、b)業績 Werk によるものとともに、c)子供 Kind による到達を想定している。クリソテミスの言葉は、明らかに「子供」によって「生への道」を歩むことを指向している。過去へのみこだわって、廻りくる日々を空しく費やすよりは、時間の流れの中で自ら変化を遂げることによって生きる道を歩むこと、即ち、子供を生み育てることがクリソテミスには可能である。

時間の流れに抗して変化を拒絶するエレクトラと、自ら変化することによって生き続けることを望むクリソテミスとの対照的な姿は、このドラマの Grundthema を具現している。それについて、ホーフマンスタール自身のメモの中に、次のような部分がある。

..... sein と werden の本質的 Antinomie. エレクトラ
——クリソテミス。
ヴァリエイションは、アリアドネ——ツェルビネッタ。¹²⁾

ホーフマンスタールは、この他の場所でも、『エレクトラ』と『ナクソス島のアリアドネ』の関連をたびたび暗示している。それは、次にみるように、この二つの作品の中には共通のテーマが流れているからである。

(3) ナクソス島のアリアドネー

R・シュトラウスとの共同作業で生れたオペラの台本の一つである『ナクソス島のアリアドネー』は、1912年に初演されて以来現在に至るまでしばしば上演されている。初め、モリエールの喜劇『町人貴族』に接続し、その主人公ジュールダン氏邸で演じられる劇中のオペラとして発表された。しかしこの構想は不成功に終り、『町人貴族』の部分はオペラ台本に組み入れられて、前芝居とし、富豪の邸内で、芸術を解さぬ主人の気紛れから、悲劇『ナクソス島のアリアドネー』に重ねてオペラ・buffaを演ずるツェルビネッター座の歌や踊りが同時上演されるという、奇妙で複雑な筋立てになっている。そのような奇抜な趣向を用いて、古伝説の主人公アリアドネーと、浮気女のツェルビネッタが同じ空間で交叉する仕掛けになっている。

アリアドネーは、去って行った恋人テーセウスに深く心を奪われ、絶望のため死の訪れを待ち望んでいる。

ここはどこ、死の国、それとも

まだ生の国？
生きていても、生きた心地がしない！
砕けた心は、永久に脈を打ちつづけるつもり？
.....13)

テーセウスを忘れられない執着の念が極わまって死の訪れを待ち望む、その言葉の響きは、同じように過去へ執着するエレクトラよりは、むしろ変化への憧れを抱くクリソテミスの言葉に近い味わいを感じさせる。

美しかった、テーセウスとアリアドネーの伝説は、
光のなかを歩き、生を楽しんだ！
なぜ覚えているのかしら？忘れてしまいたい！
.....

すべてが清らかな国、
その名前は——「死の国」
.....

あなた（死神を指す）はわたしを解放して、
わたしにわたしを返す、
この生の重荷を
わたしからとり除く。14)

そこへ現れたバッコスを死神と取り違え、その胸に身を投げたとき、それが新しい愛への献身に昇華され、変身による再生を遂げるのである。

この変身と再生の崇高な物語の中へ、男から男へと移り歩くツェルビネッタが絡んでいる。

不誠実よ——男たちは！
怪物よ——底なしに！
短い一夜、
あわただしい一日、
風のひと吹き、
ちらっとひと目——
それでもう心変わりする！
でも女は負けないかしら、
残忍な——そのくせすてきな、
不可思議な心変りの誘惑に？15)

このように歌うツェルビネッタの目には、アリアドネーは、単に恋人に去られて新しい恋人を求めた女としか映らない。アリアドネーとツェルビネッタは、最後まで異なる世界に住んだまま並存している。ただ、ツェルビネッタが相手を自分のレベルに引き降ろして理解、即ち誤解するので、二人の間に関わりがあるように見えるだけである。こうしたアリアドネー——ツェルビネッタの対比を、作者自身は、さきに引用したように、エレクトラ——クリソテミスのヴァリエーションとしてとらえている。これらの対照的な人物の組み合わせによって描こうとしたのは、過去への固執と変身、誠実と生の停滞のテーマである。

人間にとって、過去への貞節、過去を忘れないことは誠実さの一つの証しであり、アリアドネーが過ぎ去った愛を忘れられないのは、エレクトラと同じ誠実さの表われである。一方、ツェルビネッタは刹那の喜びがすべてであり誠実さとは無縁である。刹那の喜びを追う人物像は、『エレクトラ』の中でも、母親クリテムネストラにみられるが、刹那に生き瞬間ごとに過去を忘れ去るのはもとより不実な、頽廃へ通じる生き方にはかならない¹⁶⁾。しかしながら、過去への過度のこだわりと執着は生の停滞と硬化をもたらすのであり、生の充実と持続、さらにはより高い生への目覚めには、常に過去からの脱却と新たな生成 Werden が求められることになる。

このような、生における誠実と生成の矛盾は、終生にわたってホーフマンスタールの創造意欲を刺激したモチーフである。『アリアドネー』に添えられたシュトラウス宛の手紙の中で、彼自身も次のようなことを記している。

変身とは生命のいのちであり、自然の創造力の本来の神秘劇なのです。逆に、固執は硬化であり、死滅なのです。生きたいと思うものは、自分自身を超え、自分を変えなくてはなりません。つまり忘れなくてはならない。にもかかわらず、この固執、忘れないこと、誠意に、人間の尊厳すべてが結びついている。このことがまさに、生存の基盤になっている深淵のように深い矛盾の一つなのだ……わたしは一生涯このような矛盾の永遠の神秘に驚嘆することをやめないであろう、と人から指摘されたことがあります。17)

(4) テーマの重さと展開

誠実と生成のテーマは、例えばすでに初期の詩劇『白い扇』に、何げない調子でしかしはっきりと姿を見せている。妻を失った男と、夫に先立たれた女が、それぞれの思い出に魅かれて墓地に赴き、出会って言葉を交すうちに、過去への執着が我にもあらず解けそうになる気配が、世紀末的な雰囲気感を湛えたあでやかな言葉で綴られている。一筆書きの単彩画のような作品であるが、過去にこだわって歩みを止めながら無意味な生へ転落しないための時の流れの受け止め方といった展開をはのかに窺わせるものである。とはいえ、初期の韻文作品の魅力は、やはり華麗な言葉の織りなす味わいが中心になっているのであって、背景のテーマは地模様のようにそこはかとなく浮き出ているだけである。

.....
子供達のつく羽根が鳥のまねをしてとぶ、
それと同じ程度に、この劇は
人生のまねごとをしているだけで、人生と同等の重みなどありません。18)

という前口上が付けられているように、テーマは“い
ろどり豊かな瞬間の姿を描いてみせる¹⁸⁾”ための下絵に
すぎないのである。

ところが『エレクトラ』ではテーマの重みが増して、
誠実と生成ないしは変身の矛盾そのものが、エレクトラ
とクリソテミスという人物像の中に具現化されている。
ただ、『エレクトラ』の場合、変化による生成の方向は
いわば副次的な人物であるクリソテミスを通して低い声
音で語られるのであるけれども、より後期の作である
『ナクソス島のアリアドネー』に至って、奇蹟的な変身
と再生そのものが露わに描かれる。『エレクトラ』の大
団円では、復讐が果されたにもかかわらず、主人公に再
生は訪れないまま倒れて逝く。こうした結末が心に浮ん
だ経緯をホーフマンスタール自身が書き残している。

『エレクトラ』——その最初の思いつきは1901年9月だった。
当時私は『ボンビーリア¹⁹⁾』のための勉強に、『リチャード三
世』とソポクレスの『エレクトラ』を読んでいた。即座にこの
エレクトラの姿は別の形に変わった。結末もすぐに思い浮んだ。
つまり彼女はもはや生き続けられないということ、復讐が行わ
れたとき彼女の生命は彼女の身体からほとぼり出てしまうに
ちがいないということ……²⁰⁾

古代ギリシャ悲劇におけるエレクトラの怒りや狂気
は、不正によって乱された秩序の回復を望む世界全体の
意志に照応しているので、不正なものが亡ぼされること
によってその怒りや狂気が癒され、周囲との調和が回復
することも可能である。しかし、ホーフマンスタールの
作り上げたエレクトラ像は、外部世界の狂いを反映して
いるというよりは、孤絶した怨念による自己崩壊の様相
を呈している。そして、夢み続けた復讐の実現も、周囲
との連関を回復する契機とはなりえない。それほどまで
に外部世界との断絶は深く、夢想の中に固く閉じこめら
れているのである。このようなエレクトラ像には、フロ
イトの『ヒステリー研究』に見られる症例がかなり大き
な影を落していると考えられる。

オレストの手によってついに復讐が成し遂げられたと
き、湧きあがる歓声を耳にしてエレクトラは敷居の上にな
らずくまってしまう。

……………あの人がとはみな私を待っているのだ、
わたしは知っている、みんな私に輪舞を先導してもらおうと待
っているのを。でもわたしは、
立ち上がることができない。大海が、
すさまじい、幾重にも重なった大海が、
わたしの手足を埋めようとする。わたしは、
立ち上がることができない。²¹⁾

エレクトラにとって外部の世界は、もはや圧倒的な重圧

でしかなく、そこからの呼び声を聞いても、すぐに身を
起すことさえできなくなっていたのだ。最後に一度立ち
上ったエレクトラが口にする言葉は

黙って踊れ。……………
……………私は幸福の重荷を負っている。
そしてあなたがたの先に立って踊るのだ。
私達のように幸福な者にふさわしい事は唯一つ、
黙して、踊れ。²²⁾

そして“なお二、三步張りつめた勝利の歩みを運びくず
おれる。²³⁾”

(5) 『エレクトラ』と『チャンドス卿の手紙』

ここでエレクトラが“黙って踊る”舞いの意味は軽く
ない。怨念からの解放のうちに生命が燃えつきるとき、
瞬間的に訪れる至福と充足が、この舞いの中で表現され
るわけである。そのような至福の瞬間の表現に、言葉で
はなく舞いが用いられていることは、前年に発表された
『チャンドス卿の手紙』とその後のホーフマンスタールの
創作活動全体の流れを感じさせるものである。『チャ
ンドス卿の手紙』は、華やかな文学作品の数々を発表し
てきたチャンドス卿が、言語表現に対する不信に陥り文
学活動を放棄する旨を述べた書翰の形になっている。フ
ランシス・バイコン宛という想定で書かれているが、チ
ャンドス卿は架空の人物であり、手紙は完全な創作であ
る。この作品は、ホーフマンスタールの文学活動全体か
らみて、際立った転回点を示すものとされている。チャ
ンドス卿の陥った言語不信と創作意欲の喪失が、そのま
ま作者自身の状況を投影したものと見ることはできない
けれども、才能のおもむくままにきらびやかな言葉を駆
使して絢爛たる言語芸術を織り上げてきた「早熟の天才
詩人ホーフマンスタール」に区切りをつけ、これ以後は
韻文作品から遠ざかって、劇作と散文の創作へ向うこと
になる。

『エレクトラ』は、ちょうどこの『チャンドス卿の手
紙』を発表する前年あたりから計画していた戯曲であ
り、言語表現の輝きが、魅力を減じはじめた時期の作品
と見ることができる。“黙して踊る”というエレクトラ
の最後の台詞は、チャンドス卿の言語不信に照応してい
るようにも聞こえる。また、その最後の舞いは、この時
期以後ホーフマンスタールの関心が、言語によって表現
しうるものの外へも広がっていくことの反映であろう。
その広がりが、R・シュトラウスとの共同作業の開花へ
もつながるのである。

そうしたなかで、固執と誠実に対する生成と変身の矛
盾と融合のテーマは、ホーフマンスタール文学の源の一

つとして、当初から基調に流れ、次第に明確な形象を結んでゆくのである。

〔注〕

Hofmannsthal, Hugo von.: Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden, Frankfurt am Main, 1979, (Fischer Taschenbuch Verlag) については、次の略号で示す。

G. D IGedichte Dramen I

D IIDramen II

D VDramen V

R. u. A III ...Reden und Aufsätze III

- 1) 心理学用語で、エディプス・コンプレクスと対照的に、娘が父を慕い母を憎む心情をエレクトラ・コンプレクスと呼ぶのは、この悲劇に由来する。
- 2) D II SS. 190~191
- 3) D II S. 195
- 4) R. u. A III S. 603
- 5) 例えば『痴人と死』の主人公クラウディオ
- 6) Nehring, Wolfgang: Die Tat bei Hofmannsthal Stuttgart, 1966
- 7) D II S. 225
- 8) D II S. 220
- 9) D II S. 196
- 10) R. u. A III S. 603
- 11) " SS. 599~627

12) " S. 603

13) D V S. 201 『Ariadne auf Naxos』は内垣啓一訳による。

14) " S. 201 及び S. 204

15) " S. 206

16) このような、瞬間から瞬間に生きる人物像については、別の機会に詳しく分析を試みるつもりである。

17) D V S. 297

18) D I S. 455 神品芳夫訳による。

19) 17世紀末の犯罪事件をヒントにして計画された戯曲。未完成

20) Hofmannsthal, H. v.: Gesammelte Werke in Einzelausgaben, Aufzeichnungen S. 131

Frankfurt a. M. 1959 (Fischer Verlag)

21) D II S. 233

22) D II SS. 233~234

23) D II S. 234

〔参考文献〕

- Wyss, Hugo: Die Frau in der Dichtung Hofmannsthals, Zürich 1954, (Max Niehans Verlag)
- Broch, Hermann: Hofmannsthal und seine Zeit, München, 1964 (Piper-Bücherei)
- Muerdel-Dormer, Lore: Hugo von Hofmannsthal, Bonn 1975, (Bouvier Verlag)
- 川村二郎: チャンドスの城 1976 (講談社)
- ホーフマンスタール選集 (河出書房新社)